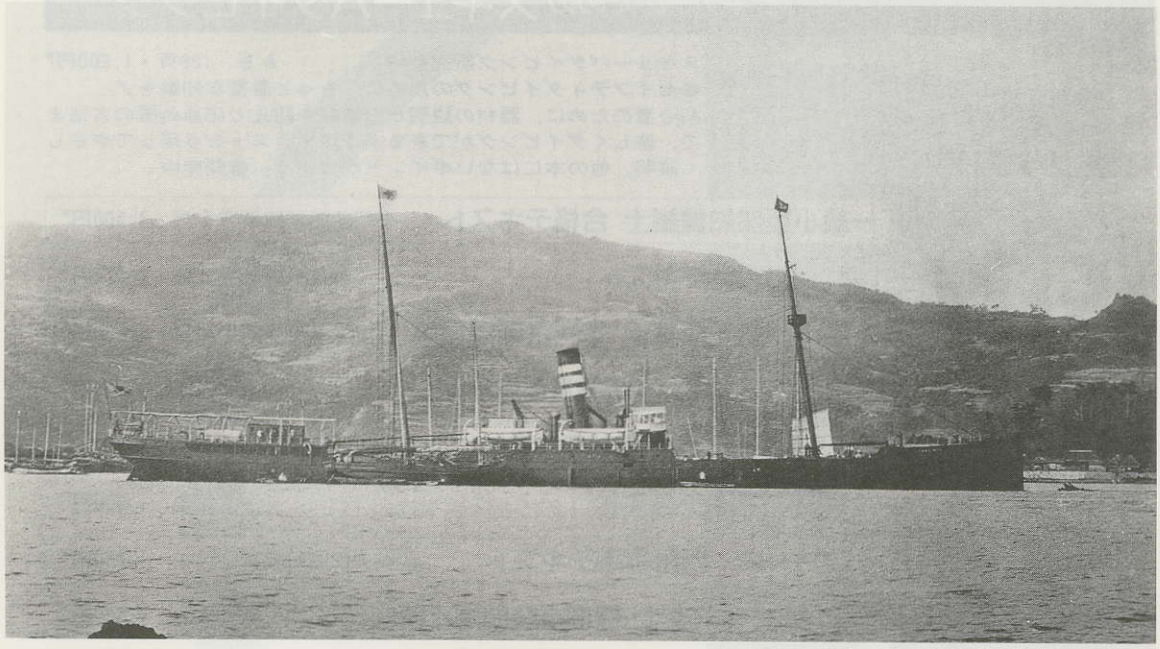
勝　立　丸

《主要目》鋼製汽船、三井物産所属、3,248総トン、主機三連成レシプロ、速力8ノット、1888年R．ディクソン社（英国）建造、前名パラスPallas

韓国李朝の軍艦に化けた三井の石炭運搬船



写真・木津重俊

石炭船変じて韓国軍艦「揚武」に

王朝末期というのは、いずこも哀れなものだが、日韓併合前の李朝末期ほど気の毒な王朝はないのではないか。中央集権的な官僚制度と、儒教色の濃い文治政策で韓国を支配してきた李王朝も、国力が衰えた末期には、宗主国である清国と、朝鮮半島に野心を持つ日本とロシアの三国に翻弄され、張り子の虎のような主体性のない存在になっていた。

一八九五（明治二十八）年、景福宮に乱入した武装グループが、国王李太王の后である閔妃（みんひ）を暗殺するという事件が起きた。グループの主体は日本人で、事件の黒幕は、韓国駐在の日本公使であったといわれている。そのころ、国政をかげで操っていた閔妃は、清の西太后に似た権勢欲の強い女性であり、ロシアに親近感をもっていたので、日本にとっては好ましくない王妃だった。

閔妃暗殺事件から八年後の一九〇三（明治三十六）年、李太王の即位四十年祝典が開催されることになり、行事の一つとして、各国艦隊を仁川によび、満艦飾の中で礼砲セレモニーを行うことが決まった。

ところが、当時の韓国には、海軍もなければ答砲をうつべき軍艦もない。そこで日本は、貨物船一隻を軍艦に仕立て、これを三井物産

を通じて、五十五万円で韓国に売り込んだ。この船が「勝立丸」（かちだてまる）、すなわち韓国軍艦「揚武」である。

支払いに難儀した当時の韓国

「勝立丸」の前身は英国船で、一八九四（明治二十七）年に、三井物産が二十五万円で手に入れたものだった。三池勝立坑にちなみ「勝立丸」と名づけられ、口之津から香港への石炭輸送に従事した。

韓国へ回航するにあたっては、八サンチ砲四門（船首尾両脇）と五サンチ砲二門（船橋両脇）が装備されたが、五十五万円という船価ははたしてどんなものだろう。

現在の物価との比較は難しいが、米の値段などを目安に、だいたい四千倍の変動とすると、当時の五十五万円は今の二十億円程度になる。船齢十五年の老朽船が二十億円。現代の相場からすれば高いのではないか。

契約では代金は三回に分割され、二十万円は本船の仁川到着後一カ月以内、残金は翌年と翌々年に半額ずつ支払うものとされた。

ところが、「勝立丸」改め「揚武」が一九〇三年四月に仁川に着いたのに、二カ月たっても二十万円の支払いがない。やむなく、日本公使が公文書で韓国に抗議した結果、三カ月後にようやくこれが支払われた。遅延は、韓国の財政が窮乏していたからだった。

こうしてやっと軍艦を入手したわけだが、李太王の即位四十年祝典は結局行われなかった。この年、天然痘が流行し、皇太子が発病したためである。

李朝唯一の軍艦「揚武」も、韓国軍艦として行動することなく、仁川に停泊したままで終わった。その間、メンテナンスを担当したのは日本人船員であり、韓国の軍人は乗船しなかった。であるから、この船を韓国軍艦とすること自体、問題があるともいえる。

翌一九〇四（明治三十七）年に日露戦争が勃発。「揚武」は韓国軍艦であるにもかかわらず、日本海軍の仮装巡洋艦として華北水域で稼働した。仮装巡洋艦への艤装工事は横須賀海軍工廠で施工、弾薬庫を新設したが、兵装は従前のままだったという。

その後、日韓併合の前年（一九〇九年）に原田商行に身売り、「勝立丸」の船名に戻っている。次いで一九一三（大正二）年には、八馬家（後の八馬汽船）の船になった。

「勝立丸」の幽霊のはなし

さえない生涯の「勝立丸」に妙にぴったりの暗いはなしが、米窪満亮の名著『マドロスの悲哀』にのっている。「揚武」になる前の石炭運搬船時代のことで、内容はこうだ。

当時、東南アジア航路の船では、機関員たちが金儲けのため、密航者を船底付近に隠して運ぶことがあった。

たまたま、「勝立丸」が女九人、男二人の密航者を乗せて長崎を出港、口之津へ向かったところ、ボイラーが破裂し、気の毒にも全員ゆでだこのようになって死んでしまった。女九人は、おそらく「からゆきさん」であろう。船は、修理のため長崎に引き返すことになったが、死体の始末に困った機関員たちは、手足を折って石炭灰のバケツに押し込み、灰と一緒にこれを海に捨てたという。

それ以来、「勝立丸」に幽霊が出るようになった。ボイラー室の方から笑い声やうめき声が聞こえる。むせびなく女の声のときもある。青白い手がランプの影から出る。ハンマーやたがねが、ボイラーの下に持っていかれる。死体の始末をした船員が、手をくじき足を折る。こんな異変が相次いだ。

ついには船員も慣れっこになり、幽霊が出ても驚かなかったというのである。

一九一六（大正五）年九月、「勝立丸」は長江中流を出港し、上海を経て八幡へ向かう途中、東シナ海で遭難、沈没した。最後までついていない船だった。

（山田　廸生）